小・中学校における

通常の学級担任のための指導のアイデア

―特別な教育的支援が必要な子どもへの指導・支援の工夫―

平成17年3月
北九州市教育委員会

Ⅲ

学習に困難を示す子どものための各教科等の指導・支援の工夫

国語　話すⅰ
分かりやすく話すことができるために

国語　話すⅱ
助詞が正しく使えるようになるために

国語　読む
音読が正しくできるようになるために

国語　書くⅰ
文字を正しくていねいに書くために

国語　書くⅱ
特殊音節が書けるようになるために

国語　書くⅲ
漢字を覚えて書けるようになるために

国語　作文
作文が書けるようになるために

国語　板書の視写
視写しやすい板書の工夫

国語　テスト
抵抗なくテストに取り組むために

算数　計算
計算問題ができるようになるために

算数　文章題
文章題ができるようになるために

算数　図形
図形問題ができるようになるために

社　会
資料を正しく読み取るために

理　科
実験や観察がスムーズにできるために

体　育
運動を楽しくできるようにするために

音　楽
リコーダーをうまく演奏するために

図画工作
楽しく表現活動をするために

総合的な学習の時間
インタビューがうまくできるために

このアイデア集では、各ページに支援内容の項目を「～ために」として表題に掲げています。子どもの実態やニーズに応じて必要な項目からお読みください。

国語 話す i

分かりやすく話すことができるために

○こんなときは

「あれ、それ、などの指示語だけで表現する。」「言葉を適切に使って表現することが難しい。」「話が長くなると内容が分からなくなり混乱する。」といった子どもがいます。聞いたことは理解でき、話したいことがあるにもかかわらず、聞き手に分かるように話すことがうまくできないのです。

●それはどうして？

脈絡のない話し方になるのは、話したい内容を順序立てて、適切な言葉を選びながらうまくまとめることが難しいからです。獲得している言葉が少なかったり言葉を思い出すことが難しかったりすると、適切な言葉を選んで表現することが難しくなります。「過去」「現在」といった時間経過の把握があいまいだったり、因果関係が理解できていなかったりすることから起こる場合もあります。

◎ 支援が必要な子どもへの配慮

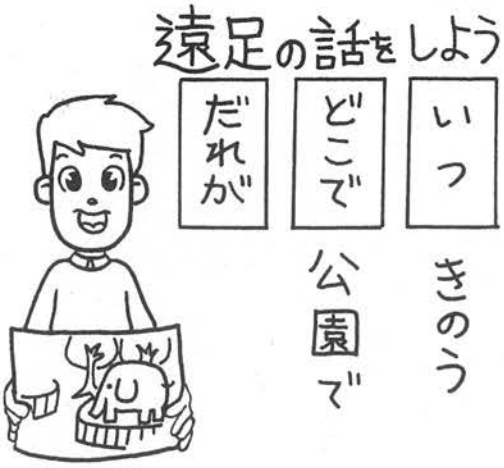
○話し始めや途中で話が詰まったときには、先生が分かる範囲で補足してあげると、後が続けられます。

○実物や絵、写真などを活用して、話が続けられるように工夫します。

○話した内容を先生が書き取ったり、抜けている事柄について質問したりすることで、内容が抜けていることに気付かせます。その後に先生が補足しながらうまく話せるように工夫します。

キーワードは、話す内容の整理と確認

○日頃から情報を整理する習慣を身に付けるためには、「いつ」「どこで」「だれが」「どのように」「どうした」などの項目で話したいことを整理させ、文章化させるのもよいでしょう。項目をカードにしておくといつでも使えます。



○時系列にしたがって「はじめに」「次に」「最後に」などの言葉を使ったり「事実」と「感じたこと」を混同しないように整理させたりしてから話させましょう。話し方のポイントを紙に書いて、いつでも子どもの目に触れる場所にはっておきます。

○話すことに対して周囲を気にしすぎたり、苦手意識を持ったりしないように、最後まで話を聞くなど学級で約束事を決め、日頃から話しやすい学級の雰囲気づくりに努めます。

国語 話す ii

助詞が正しく使えるようになるために

○こんなときは

会話の中で助詞の使い方を間違える子どもがいます。

助詞がうまく使えないと、一つ一つの言葉の意味は分かっていても、助詞によって結ばれた語と語の関係から生じる意味の理解が難しくなります。文を読んだり聞いたりする場合にも、助詞の理解や使い方があいまいだと内容の理解が難しくなります。

●それはどうして？

助詞は音として持続して聞こえる時間が短く、文の中で聞き落としやすくなります。助詞は文の中で人と物事との関係を表す働きをしているので、関係性が十分につかめていないと、助詞を正しく使うことはできません。

キーワードは、ゆっくり正確に話す

○子ども自身が知っている言葉を使って話すようにします。

○明瞭な発音でゆっくり話すようにします。

○短い文で、できるだけ主語、述語を整えて話すようにします。

○何について話すのか、いくつの事柄を話すのか、話を始める時に前もって知らせておきます。話し手に注意を向けさせてから、話し始めます。また、「一つ目は、・・・二つ目は、・・・」といった話し方で、話す内容を簡単にまとめて話します。

◎ 支援が必要な子どもへの配慮

○日頃の会話を通して、保護者も先生も意識的なかかわりをすることが大切です。子どもの話を聞いて、正しい助詞を使って言い返してあげたり、「だれが」「どこで」などの質問をしたりして、適切な助詞を使わせながら文章化させます。

○助詞の使い方に誤りがみられる子どものなかには、聞いたり読んだりしたことの内容理解が難しい場合があります。指示や説明する際には、理解できているか、確認しながら進めます。

国語 読む

音読が正しくできるようになるために

○こんなときは

視力には問題がないのに、「文末を読み間違える。」「行を飛ばして読んでしまう。」「文字を抜かしたり勝手に読み替えたりする。」子どもがいます。また、たどり読みになったり、漢字の読みが困難だったりする場合もあります。

●それはどうして？

ものを見る時「一番見たいもの（図）」に焦点を当て「そのほかのもの（地）」は意識の外においています。この力が弱いと、目で文字の形をとらえること、一行の中に並ぶ文字を目で追うこと、今読んでいるところと他の行との区別をすることなどが難しくなります。

文字の意味をしっかり把握していない場合は、たどり読みになったり、文節で区切って読むことが難しくなったりします。注意を集中させないと、読み間違えたりや思い込みで読んでしまったりします。

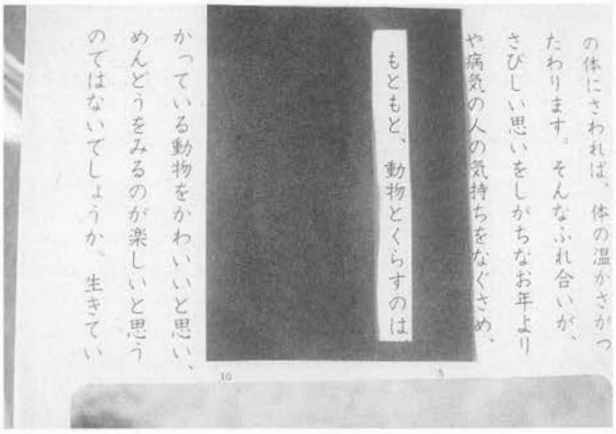
このほか、眼球の動きがうまく調節できないために文末まで目で追っていくことが難しい子どももいます。

このような課題を持つ子どもは、音読に対する苦手意識から、学年が上がるにつれて音読を嫌がる傾向にあります。読みの誤りについてよく観察し、練習方法を工夫していくことが大切です。

キーワードは、音読の練習方法の工夫

○新しい単元に入る時に、教科書の読み聞かせをします。読み聞かせの時には、意図的に文節で区切って読んでみせます。補助手段の必要な子どもには、文節ごとに斜線を書き込ませたり、読めない漢字には必要に応じて仮名を打たせたりします。

○先生の範読に合わせて読む方法、一行ごとに交代して読む方法など、音読の練習に変化を持たせながら、少しずつ長く読めるようにします。



◎ 支援が必要な子どもへの配慮

○定規を当てたり指でなぞったりして読ませ、読んでいるところを注目させます。行を飛ばして読んでしまう場合は、読んでいる行だけしか見えないように他の場所を隠したり、一行分のスリットを空けたページカバーを使ったりする方法もあります。(挿絵参照)

○家庭での練習では、模範の音読ＣＤを活用します。

○読み間違ったときは、その都度正しく言い直させます。高学年では、自分の課題を意識して、自ら補助手段を使うなどの意識を持たせるように工夫します。

国語 書く i

文字を正しく ていねいに書くために

○こんなときは

文字を書くことが苦手な子どもがいます。どうしてもひらがなやカタカナを書くことができなかったり、鏡に映したように左右が反転した文字を書いたりします。また、判読しにくい乱雑な文字を書いたり、筆順が異なる書き方をしたりします。

●それはどうして？

文字を書くことが苦手な子どもの中には、筆順を意識できずに記号のように目でとらえたそのままを書こうとする子どもがいます。また、形の大きさや向き、重なりなどが区別できず、本数など細かいところに注意を向けられない子どももいます。

◎ 支援が必要な子どもへの配慮

○初期の段階では、表記の正しさよりも、書く意欲を大切にします。
○鉛筆の濃さを工夫し、握りを固定させるためにグリップを付けるなどして調整をします。
○書き取りの場合は、声を出して文字を読みながら書き写させます。
○行間、文字やます目の大きさなどの工夫をします。
○問題数は、少なめにして達成感を持たせます。

キーワードは、「書けた！」という達成感

○正しい姿勢と正しい筆記用具の持ち方を身に付けます。

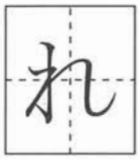
○文字の学習プリントで、段階的に練習します。

手本	1	2	3	4	5
し	し	し	・		
① ② こ	① ②	① ②	① ・		

○お手本を上に置く方が鏡文字は少なくなります。

・鏡文字になりやすい文字は「く」「つ」「し」「う」などです。

○ひらがなは、視写よりも写し書きの方が形を覚えられます。



・4分割されたます目に文字を書きます。

・間違いやすい文字は、「れ」「ね」「わ」などです。

○筆順の番号にしたがって書きます。

・画数の少ない文字から画数の多い文字へと進めます。

・始点と終点を意識して、ていねいに書かせます。

○「文字書き歌」を活用します。

・まるいわなげの「わ」

・はねて、つながる、れっしゃの「れ」など。

国語 書く ii

特殊音節が書けるようになるために

○こんなときは

小さな「ゃ、ゅ、ょ」や、つまる「っ」、伸ばす「う」など特殊音節の言葉を適切に書くことができない子どもがいます。

●それはどうして？

言葉の音の聞き分けが不十分で、文字との結び付きも確立していないためです。

◎ 支援が必要な子どもへの配慮

○視覚的に理解を促すために、色カードや手のサインを使います。

・色カード（清音は青色、長音は赤色、促音は黄色）

・手のサイン（拗音は両手をねじる、促音はグーの手、長音は指で伸ばす）

○４分割されたます目ノートを活用します。

・小さな「ゃ、ゅ、ょ」や、つまる「っ」の文字の大きさや位置を意識して書かせます。

○文字の違い、読み方の違い、意味の違いを段階的に理解させます。

キーワードは、表記のルールの習熟

○先生の言う音を聞き取って○で囲ませます。

1	きゃ	き	し
2	きゃ	ちゃ	しゃ
3	しゃ	きゃ	ちゃ
4	みゃ	みゅ	みょ
5	りゃ	じゃ	りゅ

○間違いを訂正しながら、表記のルールを身に付けます。

むかしむかし、あるところに　おじいさんと　おばさんが、なかよく　くらしっておりました。
ある日、おはあさんが、いつものよに　川でせんたくをしておりますと　おうきなももが　むこのほうから　どんぶらこと　ながれって　きました。

○カードの絵と文を合わせます。

○特殊音節の部分に印を付け、音の並び方に注意を向けさせます。

○下のような単語の学習プリントを活用して練習します。

ことば	1	2	3	4	5
り	り	り	り		
ゅ	ゅ	ゅ			
う	う				

国語 書く iii

漢字を覚えて書けるようになるために

○こんなときは

漢字を覚えることや書くことが苦手な子どもがいます。

●それはどうして？

漢字を覚えることが苦手な子どもの中には、目で見て記憶することが弱いために漢字の筆順どおりに書けない子どもがいます。

目で見て全体を把握する力が弱いと、漢字の形を把握したり書くときにその形を構成したりすることが困難になります。また、音訓の読み方でつまずき、漢字の読み替えに対応できないこともあります。

◎ 支援が必要な子どもへの配慮

○文字の形やバランスや書き順については、「できれば」という程度にとどめておき、書く意欲やていねいさをほめるようにします。

○学習の量は、少なめにして達成感が持てるようにします。

・例えば、毎日10個の漢字を３回程度書いて練習するなど。

○補助手段としてパソコンやカードなどを活用するとよい場合があります。

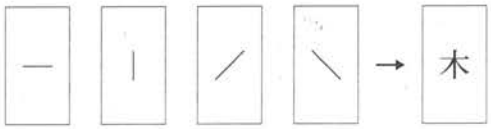
キーワードは、覚え方のコツを教えてあげること

○漢字を部分に分解して組み立てる足し算の方法を使います。

「公は、カタカナのハムだよ。」

○重ねると漢字ができるカードを使います。

1　2　3　4



○書き順の方向を言葉で言います。

1　よこ　　2　たて　　3　ななめひだり　　4　ななめみぎ

○漢字の構成を示します。

お日様　たす　青空　は　晴れ

○部分を組み合わせて作ります。

はれ　　日　　あお

○部首の組み合わせを言いながら覚えます。

例.「晴れという漢字は、お日様の横に青と書く。」

○「へん」と「つくり」などの手がかりを活用します。

例.「晴れという漢字は、左に日を書き、右に青を書く。」

○漢字の成り立ちや意味に興味を持たせます。

例.「川という字は、水が流れているような字だね。」

国語 作文

作文が書けるようになるために

○こんなときは

作文を書くことが極端に苦手な子どもがいます。苦手意識が高じて、作文と聞いただけで嫌がって全く取り組もうとしない子どももいます。

●それはどうして？

作文を書くためには、体験したことを思い出さなければなりません。記憶が苦手な場合、体験したことを順序立てて思い出すことができないために、何から書き始め、どうやって書き進めるかが分かりません。

また、自分の考えをまとめることや、文法の理解が難しいと、書きたい内容があっても正しく文章化することができません。

見通しを立てることが困難で、作文を構成していく手順が分からないという場合もあります。

◎ 支援が必要な子どもへの配慮

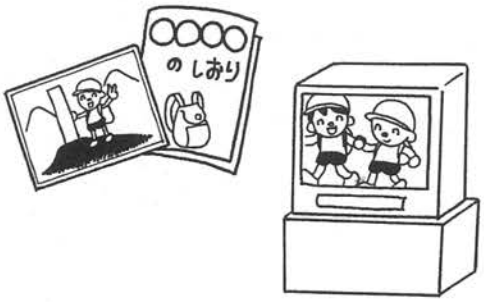
○作文を書き上げたときは、文字が少々整っていなくても量が少々不足していても「よし」として、書き上げたことを積極的にほめます。

○文字を書くことが特に苦手な子どもには、家庭などではパソコンで入力させてみましょう。

キーワードは、このやり方なら「書けた！」という体験

○視覚的な教材を用います。

・しおりや写真などをそばに置いておくと、内容を思い出しやすく、書く材料を見つけやすくなります。



○作文の手順や文章モデルを具体的に示します。

・題材に応じて、作文を構成する手順を簡単な形で示します。

「いつ、どこで、だれが、何をした」

「はじめに、次に、それから、最後に」など

・穴埋め形式のプリントで簡単な作文を書く練習をする方法もあります。

・必要に応じて、すぐに使える文型や表現のモデルを示します。

穴埋めの作文例

ぼくは（　　）に行きました。

はじめに（　　）をしました。

○書く負担を軽減する方法や代替手段を用います。

・最も興味関心が表われている部分を取り上げて、少なめの量で書かせると、取りかかりやすくなります。書く量のめやすは、子どもが達成可能な量にします。

・用紙は、ます目や枠の大きさ、形式の工夫をします。

・一人だけ大きめのます目を使うのを嫌がる場合は、クラス全員にいくつかの大きさのます目から自分が書きやすいものを選ばせる方法もあります。

国語 板書の視写

視写しやすい板書の工夫

○こんなときは

板書の文字や図をノートに写す時に、正しく書き写すことができなかったり、いつも時間内に書き終わることができなかったりする子どもがいます。そうしたことが重なると、だんだん板書を写す意欲がなくなります。

ノートを点検してみると、写した内容が不正確、中途半端であるため「やる気がない。」「いい加減だ。」と評価されがちです。

●それはどうして？

文字や図形を見て記憶し、再現することが難しいと、文字や図形を正確に写すことができません。すばやく目でとらえることが難しいと、黒板上の板書内容と手元のノートの記入する箇所がずれることがあります。その結果、視写が苦手になってきます。

◎ 支援が必要な子どもへの配慮

○なるべく黒板に近い座席にします。
○ノートや連絡帳を点検します。
○雑であっても、視写に取り組んだことをほめて意欲を持たせます。

キーワードは、見やすい板書の工夫

○子どもが写しやすい板書の工夫をします。

・計画的で見やすい板書（位置・色分け・線による強調など）を心がけましょう。

・板書の量は少なくしましょう。

・板書の苦手な子どもには、事前に内容を書いたプリントを渡しておきましょう。

・板書の書き始めは、一ます空け、ノートと同じように改行しましょう。

・難しい図表などは、あらかじめプリントにして配りましょう。

・低学年では、ます目入りの黒板を活用しましょう。

○板書内容をプリントにして渡し、手元で写させます。視線の移動が少なく理解しやすくなります。

○文章を小さな声に出して読んでから書くようにさせると、聴覚からの情報を利用して目で見て書くことの苦手さを補うことができます。

国語 テスト

抵抗なく テストに取り組むために

○こんなときは

練習問題はある程度できるのに、テストになると答えを書くことがほとんどできない子どもがいます。また、書いても答えを頻繁に間違え、問題文を読んでいないのではないかと思われる子どももいます。

テストの点が取れないため、実際より学力が低く見えたり、やる気がないように見えたりします。学年が上がって設問が複雑になると、この傾向はますます強まってきます。

●それはどうして？

設問の意味や答え方が分からないと、テストの答えは書けません。読み取りに問題がある場合、問題文が読めても、題意や答え方がとらえにくいのです。設問中の語句の意味や漢字の読み方が分からないため、同様の状況になることもあります。

こうした理由から、テストに取り組む意欲が減退し、初めから書こうとしなくなる、あるいは分からないものとあきらめてしまうようになりがちです。

キーワードは、テスト前の練習と手段の工夫

○テストの前にテストの答え方を練習します。

・よく似た形式の問題で題意や解答方法の学習を行います。

・問題文によくみられる語句や漢字の意味を説明します。

・問題文のキーワードにしるしを付けて、要点を把握しやすくします。

・読解問題など、実際の問題文をＯＨＰなどで大きく提示して、どのあたりに答えが隠されているかなど、解き方を学習するという方法もあります。

○テストの問題で難しそうなものは後回しにしてよいことを助言します。

○マークシートや選択問題の形式を用いて、書く負担を軽減するのも一つの方法です。

◎　支援が必要な子どもへの配慮

○必要に応じて、代替手段や補助手段を活用します。

・問題文が読めない場合は、先生が問題文を読み上げるとよいでしょう。

・書くことが特に苦手な場合は、書く時間を延長したり、解答欄を大きくしたりします。必要に応じて、口答による回答を担任が代筆する方法もあります。

・テストを行う場所も配慮する必要があるかもしれません。そのような時は、本人の意向を尊重します。

※　中学校では、定期考査の問題を先生が自作することが多いので、問題用紙・解答用紙ともに、目で見て分かりやすく、設問も題意が理解しやすいように配慮する必要があります。

算数 計算

計算問題ができるようになるために

○こんなときは

知的には遅れがないのに、計算が正しくできなかったり、できても時間がかかったりする子どもがいます。

●それはどうして？

聞き取って覚えることが苦手な子どもは、簡単な一桁の足し算、引き算、掛け算九九、公式や単位の換算がなかなか覚えられません。暗算で計算すると、繰り上がった数を足し忘れたり、繰り下がったことを忘れて計算したりすることもあります。

全体の位置や方向がとらえにくいと、筆算で違う桁同士を計算してしまったり、横の式を筆算に直す時に桁をそろえ間違えたりすることもあります。

書くのが苦手な子どもは、暗算で済ませようとするので、桁数が多くなると混乱することがあります。

◎ 支援が必要な子どもへの配慮

○できないからと言って、掛け算九九の暗記ばかりさせるのではなく、表やカードなどの補助手段を使って計算させてみましょう。自分なりのやり方なら計算できるという自信を持たせることが大切です。

○計算問題の数は少なめにして、できたという実感を持たせます。

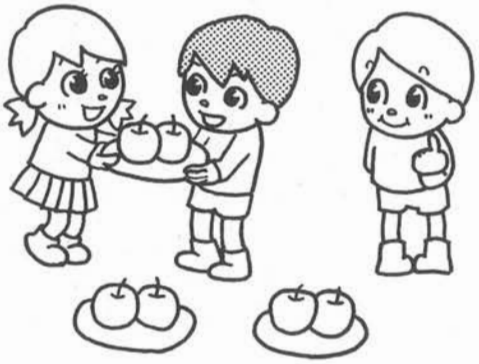
キーワードは、本人のペースに合わせることと補助手段の活用

○学級内にゆっくりでもきちんとできていることを認める雰囲気をつくり、それぞれの子どものペースや過程を大切にします。

○計算の時間を計る場合には、他の子どもと競わせるのではなく、本人自身の計算力の向上を評価します。

○計算練習をさせる時には、ゆっくりでも自力でさせる場面と補助手段を使って多くの問題を速くさせる場面に分けるのも一つの方法です。計算で不安を感じる場合は、掛け算九九表を見ることや電卓を使うことを認めることも考えられます。

○割り算の筆算などの手順を覚えられない場合は、割り算の手順表を作成し、それを見ながらするとよいでしょう。計算の手順を言葉にして、それを唱えながらする方が効果的な子どももいます。



○筆算では、繰り上がった数は必ず書き、記憶だけに頼らない方法を身に付けさせます。

○位取りを意識できるようにます目やたての罫線などがあるノートやプリントを使います。ノートには、大きめの字で書き、別の問題との間隔を広めにとらせるようにします。

○お金に置き換えて考えさせると、よく分かる子どももいます。

算数 文章題

文章題ができるようになるために

○こんなときは

計算はできるのに文章題が解けない子どもがいます。適当に数字だけ選び出して式を作って答えを出してしまいます。

●それはどうして？

算数で、論理的な思考力が最も必要とされるのは文章題です。

文章を読み、式を立てるまでの段階は、論理的に文章の意味を理解する過程です。何が答えとして求められているのか、どの演算を使うのか、どちらの数字から足したり引いたり計算するのか理解しなければなりません。読みにつまずく子どもや論理的に考えることが苦手な子どもは文章題でつまずきがちです。

◎ 支援が必要な子どもへの配慮

○難しい言葉や数字が並んでいると、ますます混乱してしまいます。その子どもが関心を持ち、やる気を引き出すような場面や内容に置き換えます。

○簡単な数字でできている低学年用の問題で、加減乗除の何を使うかということや解き方の見通しを立てることに慣れさせておくことは効果的です。

キーワードは、本人の得意な解き方を見つけてあげること

子どもが得意とする理解の仕方に合わせて、問題提示、問題文、問題理解の支援の方法を工夫します。

○問題提示の工夫

・問題文を黙読して理解できない子どもには、先生が読み上げます。
・絵や図などの視覚的な手がかりを文章に添えて提示します。

○問題文の工夫

・「もらった」「食べた」「あげた」などの具体的な操作が可能な状況を問題文として取り上げます。
・子どもが経験したことがある場面を文章題にします。
・子どもの関心を引く人やキャラクター、物を問題文に入れます。

○問題理解の支援の工夫

・複雑な問題文は、やさしい言葉で言い換えます。
・絵や線分図を描いて、全体と部分の関係を理解させます。
・徐々に自分で絵や線分図を描かせて解くように促します。
・おはじきやタイルなどを使って操作させます。

※文章をパターン化して教える方法もあります。

〈例〉「もらう」「買う」「加える」→足し算
「食べる」「使う」「あげる」→引き算
「分ける」→割り算

※文意を読み取る時にポイントとなる言葉や数字に線を引かせると理解しやすいでしょう。

算数 図形

図形問題ができるようになるために

○こんなときは

コンパスや分度器などの道具を使うのが苦手な子ども、作図が正しくできない子ども、面積や体積を求めることが苦手な子どもがいます。

●それはどうして？

図形やグラフなどの問題を解くためには、線や点を目で追って形をとらえ、位置関係を理解し、定規などの道具が使えなければなりません。しかし、目で見て全体を把握することが苦手な子どもは、形や位置関係の把握が弱く、これらのことが難しくなります。

手先が不器用な場合、定規をしっかり押さえて線を引くことが難しかったり、コンパスが上手に扱えず円がきちんと閉じなかったりすることがあります。

また、論理的な思考が難しく、面積や体積をどうしたら求められるのか分からない子どもや公式を覚えるのが難しい子どももいます。

◎ 支援が必要な子どもへの配慮

○視覚的なゲームやパズルに親しませておくと、方向や形に対する感覚が育ち、地から図を見分ける練習にもなります。

○1ミリメートルの目盛りがとらえにくい子どもには、センチメートルの目盛りだけの定規を作って使わせ、ミリ単位の読み取りは要求しないようにします。

キーワードは、操作活動を取り入れることと道具選び

○操作活動を取り入れます。

・形を体感させます。例えば、校庭に□や△の形にレンガなどを敷き、その上を歩かせ、角の違いに気付かせます。

・棒を使っていろいろな形を作り、辺や頂点に注目させます。

・色板を重ね合わせて仲間分けをさせます。また、その中のいくつかを組み合わせて別の形を作るゲームをさせてみましょう。

・変形した立体の体積を求める場合には、１立方センチメートルの積み木を並べさせ、量感をつかませるとよいでしょう。

○定規や分度器は、線がはっきりしていて目盛りが大きく読みやすいものを選ぶようにします。

○コンパスは、重くてしっかりとしている製図用が使いやすいようです。

○道具の使い方を工夫します。

定規の裏にビニールテープをはると滑りにくく、使いやすくなります。コンパスの針を刺す位置の裏に厚紙などを敷くと安定して描きやすくなります。

○コンパスの持ち方、押さえ方、指先の使い方などは繰り返していねいに指導します。

○公式が覚えられなかったり、単位が換算できなかったりした場合は、公式表や換算表を使うことを認めるようにします。

社会

資料を正しく読み取るために

○こんなときは

資料を読み取る際、いろいろな要素が関係してくると、整理して考えることが難しい子どもがいます。また、学習への参加意欲が低下している子どもがいます。

●それはどうして？

注意集中が難しい子どもは、一つの資料に注目して何を読み取ればよいか、落ち着いて考えることが難しかったり、一度にいくつもの要素を提示すると、混乱してしまったりすることがあります。

また、友だちとの関係がうまくいかず、グループ活動への参加が困難になったり、落ち着いて学習に取り組むことができなかったりします。そのため、社会科の学習に苦手意識が強くなり、学習への参加意欲が低下してしまいます。

◎　支援が必要な子どもへの配慮

○課題を提示する際、考える視点を一つか二つに絞って提示します。
○考える課題を具体的な作業に置き換え、作業をしながら気付きを促します。
○テストの時など、個別に視点を助言することも一つの方法です。

キーワードは、読み取りの視点を明確にして伝えること

○資料は、読み取る視点を明確にします。

○具体的に作業をさせながら気付きを促します。

○資料を活用する際、読み取ったり作業したりする視点は、一つに絞ると理解しやすくなります。

・次の例のように、日本の工業の盛んな地域を調べる学習では、人口、鉄道などそれぞれの要素を別々にＴＰシートに写して読み取り、その後、重ね合わせて全体的な特徴をとらえるような工夫も考えられます。

理科

実験や観察がスムーズにできるために

○こんなときは

手順を説明しても、実験に必要な道具や材料の準備に時間がかかったり、手順が分からず最後まで実験ができなかったりすることがあります。

●それはどうして？

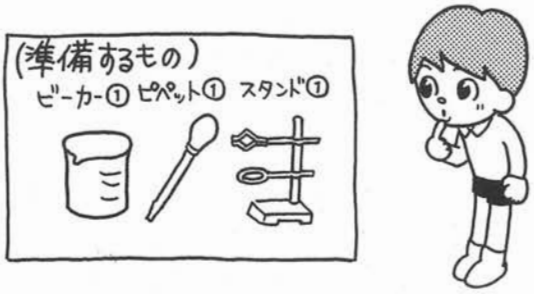
私たちは話を聞くとき、「聞きたい音や声」に注意して「他の音や声」は意識の外においています。その結果、「聞きたい音や声」の音量は増幅され「他の音や声」の音量は小さく意識されます。耳で聞き取る能力に困難さがあると、「聞きたい音や声」を浮かび上がらせることができない場合があります。また、たくさんの話し声を聞き分ける力やしばらくの間、聞いたことを覚えておく力に弱さがみられる子どももいます。

◎　支援が必要な子どもへの配慮

○言葉の指示に加えて、写真や絵、図、文字などの視覚情報を一緒に提示します。
○全体への指示の後に、机間指導を行い、学習内容を理解しているか確認します。

キーワードは、視覚情報を提示すること

○実験に必要な道具や材料は、写真や絵など視覚的に分かるように提示します。



○実験の手順は図式化して提示します。

例

【実験の手順】

①はじめに・・・・

②次に・・・・・・

③そして・・・・・

④それから・・・・

⑤最後に・・・・・

○観察のポイントを分かりやすく提示しておきます。

例

【観察のポイント】

・色がどのように変わったかな？

・形がどのように変わったかな？

体育

運動を楽しくできるようにするために

○こんなときは

運動は好きなのに、手と足の動きがバラバラで、なわとびや器械運動、球技などで身体の各部の動きがちぐはぐになり、うまくできない子どもがいます。高学年になってもボタン掛けがうまくできない、はさみがじょうずに使えない、ひも結びができない子どももいます。

●それはどうして？

身体を動かす方向や強さなどのコントロール、手と足あるいは両手で異なる動きをすること、他の人の動作を自分の身体に置き換えて模倣することの困難さが考えられます。一連の動きをつなげる運動企画の能力が低いと、跳び箱で「走る→踏み切り板を蹴る→跳び箱に手をつく→身体を移動させて跳ぶ」など、一連の動きを理解したり覚えたりすることが難しいようです。

◎ 支援が必要な子どもへの配慮

○運動ができない、嫌いだと思わせないようにします。興味のある課題や用具を工夫し「できた。」という達成感が積み重ねられるよう、補助具を用いるなど必要に応じて支援をします。

○声かけによって、動作をコントロールさせるとうまくいく場合もあります。

キーワードは、課題の工夫と用具の工夫

○感覚が鈍い、筋力が弱いなどの問題を感じたら、身体部位の知覚や筋力を高める活動を取り入れます。

・各運動に必要な動きを、体ほぐしの運動に取り入れます。

○協応運動はやさしいもの、興味のあるものから取り組みます。

・キャッチボールなどでは、ボールの大きさや材質を能力に合わせ、ゲーム性の高い活動を工夫します。

○特定の運動を身体の各部位に分けて練習します。

・単純な動作による運動遊びから始めます。次にできるようになった動作を組み合わせて運動を構成させ、複雑な動作にも挑戦させます。

○足、膝、頭などボディイメージを意識できるような活動を取り入れます。

・先生や友だちとペアを組んで、体の動かし方を理解させます。

【なわとびスモールステップでの練習（例）】

同じ位置で一定の高さとリズムで跳ぶ

↓

片手になわを持って回す

↓

なわを回したら跳ぶ

↓

タイミングが取れるまで練習する

↓

両手でなわを持ち、実際に跳ぶ

↓

タイミングの取り方は「手を回したらピョンと跳ぶよ」と動作を言語化する。

音楽

リコーダーをうまく演奏するために

○こんなときは

歌うことは好きなのに、リコーダーの演奏がうまくできない子どもがいます。穴の位置も覚えていないようで、うまく穴をふさいで音を出すことができません。無理にさせようとすると音楽の学習を拒否することもあります。

●それはどうして？

聴いた音を聞き分けたり、理解したりすることや聴いた音や目で見たものを覚えることが難しい子どもがいます。

また、身体各部位の協応運動をスムーズに行うことなどが難しいと、吹きながらリズムを取ったり、指の操作で音を変えたりするなど一度にいくつもの操作を要求されるリコーダーの演奏は、非常に難しくなります。

◎ 支援が必要な子どもへの配慮

○運動面で不器用な子どもには、道具を工夫することも有効です。

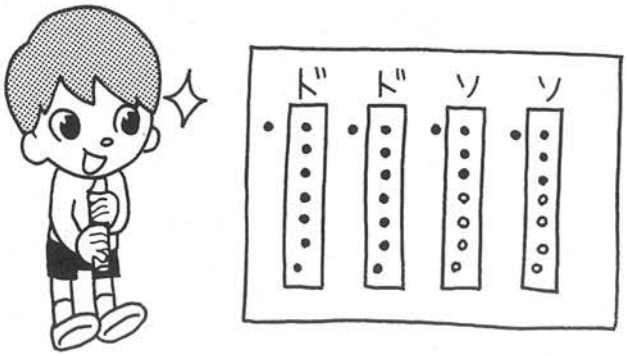
○まずは、苦手意識を取り除き、自分でも楽器を演奏してみたいという気持ちにさせることが大切です。

○個別の指導を行ったり、演奏しやすい音を中心にした簡易楽譜を作ったりするなどの工夫をします。

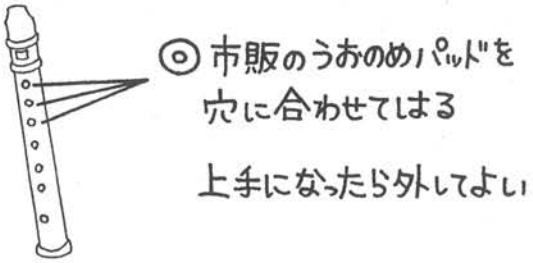
○どうしてもリコーダーの演奏が難しい場合は、無理に要求することは避けましょう。歌を歌ったり違う楽器を演奏したりすることを通して、音楽が好きになるようにしましょう。

キーワードは、楽譜の工夫と楽器の工夫

○階名を覚えさせたり、階名譜を工夫して提示したりします。



○手指の不器用さに対応する方法としてリコーダーの穴に魚の目パッドをはり、穴をふさぐ感覚が認識しやすいようにする方法もあります。



○手指の機能的な問題として難しい場合には、穴の位置が子どもの指に合わせて変えられる可動式のリコーダー（アウロス社製）もありますので、子どもの実態によって使用してみるのもよいでしょう。

図画工作

楽しく表現活動をするために

○こんなときは

他の子どもに比べてとても幼い絵しか描けず、人物画もうまく描けない子どもや物を見て描いても、その物の形を表すことができない子どもがいます。

不器用なため工作も苦手で図画工作の時間を嫌がり、友だちの邪魔をしてしまう子どももいます。

●それはどうして？

意味的な分析力が弱いと、題材を理解することが難しく活動している状況がつかみにくくなります。目で見たものを理解する力や記憶する力が弱いと、物の形や向きをとらえたりすることが難しくなります。また、形を構成する力が弱いと、線や部分を組み合わせて絵を描いたり、形を構成したりすることができにくくなります。不器用といわれる子どもの中には、運動や目と手、両手の協調運動が苦手な子どももいます。

◎ 支援が必要な子どもへの配慮

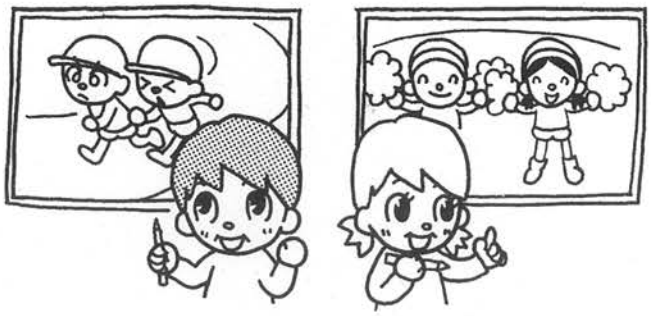
○まずは、絵や工作に対する苦手意識を取り除くことが大切です。

○完成した作品にとらわれず、作る過程を楽しむことができるように声かけをし、うまくできたところをほめるようにします。

○好きなキャラクターの色塗りや写し絵などによって描くことに慣れさせます。

キーワードは、課題の工夫と題材の工夫

○「遠足」「運動会」など自分の経験したことを思い浮かべて描いたり、作ったりするときには、そのときにどんなことをしたのかを話し合ったり、写真や場面絵などを提示したりすると取り組みやすくなります。



○モデルを示すなどして題材に対する理解を深めます。

○太陽、月、花、木などのパターン化された絵や○、△、□、直方体、立方体などいくつか描けるものや形作れる物があると、絵や工作に対する抵抗感もなくなります。

○のり、はさみ、セロハンテープ、絵の具など道具の使い方をていねいに指導するようにします。

総合的な学習の時間

インタビューがうまくできるために

○こんなときは

施設見学やゲストティーチャーを招いての学習のとき、インタビューの仕方が分からず、質問することができない子どもがいます。また、ゲストティーチャーなど大人の人にも同年齢の人に話すような調子で話しかける子どもがいます。

●それはどうして？

人は、社会とのかかわりをとおしてソーシャルスキル（社会で生活していくための技能）を身に付けていきます。しかし、周囲の人とのかかわりや状況理解が苦手なため、年齢に応じた社会性が身に付いていかない子どもがいます。

◎　支援が必要な子どもへの配慮

○取り組む前に、活動内容や目標について、個別に指示・確認するようにします。
○グループで活動する際は、仲良しの友だちや心配りのできる友だちのグループになるように配慮します。
○活動する際にモデルが必要な場合は、よいモデルとなる友だちを見せるようにします。

キーワードは、スモールステップでソーシャルスキルを高めること

○インタビューをするために、日頃から必要なスキルを身に付ける活動を工夫します。

・あいさつができる
・お礼を言うことができる
・自己紹介をすることができる
・質問をすることができる
・許可を求めることができる
・会話をすることができる

○伝える内容をカードにして携帯し、必要なときに取り出して使えるようにします。

【インタビューカードの例】

○○さんとの会話（例）

「こんにちは、△△学校の○年○組の□□です。」

↓

「質問してもいいですか？」

↓

「ありがとうございました。また、分からないことがあったら教えてください。」「次の人に代わります。」